形容詞のスケール性に関する多様性とレキシコン

菅谷 友亮（すがや ゆうすけ）
京都大学大学院／日本学術振興会
sugaya@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに

人間はなんらかの対象に対して時間的に連続して得られる知覚情報をスキャニング (scanning) し、概念世界でその対象は動くことや変化することができる。Langacker (2008) の定義によれば、形容詞 (adjective) は参与者 (participant) の非時間的な関係をプロファイルする表現である。それは時間が経過するにつれて状況が変化するプロセス (process) と対比され、静的な状態に焦点をあてる。そのような定義に基づく形容詞には、世界の静的な状態に言及することと、動的な対象の一時的局面を切り取ることという大きく分けて二つの機能がある。

しかし、両者の違いは、そのような対象がどれほど恒常的で変わらないもの、反対に言えば、どれほど変わりやすいものと解釈されているかに依存し、物理学的に考えて、変化しないものはないと考えて解釈されるときには、後者の機能しかないといえる。そしてそのとき、切り取られていない他の局面が必然的に存在することが含意される。つまり、出来事全体を基盤として、表現によってその中のある局面に焦点があてられ、他の局面ではないことを意味する。ここで、そのような局面のひとつひとつであり、知覚において比較が可能である違いのそれぞれを本論では「値 (value) 」と呼ぶ。そして、切り取られる値や値の集合以外に対比される値や値の集合があるが、実際に、対比される値や値の集合がどのように、どの程度意味されるかは、なんらかの対象（本論では、それは出来事の中の目立つ存在であるという意味で、Langacker の用語を援用して「参与者」と呼ぶこととする）に対する解釈の問題に大きく起因する。本論では、議論の出発点として、対比される値や値の集合の可能性を考慮に入れ、それらの値が全体としてどのように構成されるかに関する解釈のパラメターを挙げる。

ここで「値の集合」とするのは、形容詞が言語の文法カテゴリーであり、特定の値の集合を含むものとして、単一の音韻形式により表されるからである。人間は全ての値に名前をつけようと思えば可能かもしれないが、経済性の観点からそれはされない。例えば、色彩で言えば、人間が見分けられる違いより、圧倒的に言語表現として表されるものは少ない。基本的に、それぞれの言語表現が複数の値をグループ化している。

それぞれの参与者の特定の側面に関して様々な値や値の集合が経験されることが形容詞という言語のカテゴリーの獲得において第一の条件となる。例えば、常に一定の気温下の世界においては、“暑い”や“寒い”などの概念も言語表現も存在しないのは明らかである。少なくとも、“暑い”に結びつく値、“寒い”に結びつく値の二つ、さらに加えて“どちらでもない”

©菅谷友亮、「形容詞のスケール性に関する多様性とレキシコン」
『言語科学論集』、第 19 号 (2013)、pp. 151-178

の三つの値が必要であり、それぞれの値の獲得には知覚（体感）を別々に経験する必要がある。当然、外気の温度に対して人間が得ている値はそれだけに限らない。それぞれに限度はあるが、それらの値の間に無数の値を体得している。また、そのような経験を経て基準 (norm) が設けられ、値の集合として言語表現が対応する。さらに、「非常に」などの強意語 (intensifier) が共起すれば、値の集合の一部の下位集合を指し示すこともできる。それは、同様の値の構成のしかたをなすものに使われ、生産的で文法的な表現である。

ここでは、そのような形容詞に関わる値の構成に関する性質を「スケール性 (scalability) 」と広く定義する。スケール性は、文脈に応じて人間の解釈や捉え方 (construal) により自由に変わり、多種多様である。本論では、スケール性をわける観点を「パラメター (parameter) 」、そして、パラメターの値（本論での「値」ではない）を「解釈のタイプ (type of construal) 」と呼ぶ。また重要なことは、ひとつの言語表現に対してひとつの解釈のタイプしかとらないわけではなく、複数の解釈がそれぞれの文脈ごとに異なって表される。よって、そのような解釈のタイプの選択の問題は、単純に語彙レベルに還元させることはできず、従来研究されていたように、レキシコンや意味論のレベルからスケール性の議論をすることができない。一回一回の言語使用を参照して、統語、文脈、発話状況などの生起環境を参照し、どのような解釈のタイプであるかを判断しなければならない。しかし一方で、完全にそのようなまわりの要素によって解釈が自由であるわけではなく、言語表現によって解釈のタイプの選択の傾向やえり好みがある。よって本論では、パラメターと解釈のタイプを挙げたあと、コーパスから実際の形容詞の使用例を取り出し、使用文脈を参照して、どのような解釈がされているかを考察し、どのような分布をなしているかをみる。それによって、それぞれの形容詞のレキシコンとしての情報が一部明らかになると考える。

本論は、言語類型論的な記述や説明を目指す研究の一部である。ここでの議論の方法の特徴として、言語事実を記述し、そこから一般性を抽出するというような通例的な順序ではなく、まず 3 節において、スケール性の観点から値に関するパラメターや解釈のタイプを挙げ、どのような点によって形容詞の意味や機能は分けられ、それが文法に反映される可能性があるかについて議論を行う。そして 4 節において、日本語の形容詞を二つ取りあげて、それらが実際にどのように適用されるかを調査しつつ、それらの語彙分析を行う。4 節における具体的な事例の記述や説明が、本論における分析の対象や目標ではあるが、同時に、3 節は理論的な議論であり、様々な形容詞に適用や応用が可能である。

本論の構成に関してまとめると、2 節で本研究の関連研究を示し、3 節でパラメターと解釈のタイプについて議論する。4 節では、具体的な日本語の形容詞を分析し、最後に 5 節で本論のまとめを行う。

2. 関連研究

本節では、形容詞のスケール性に関わる先行研究を検討する。英語の形容詞の段階性に関する先行研究があり、それを示し問題点を指摘する。2.1 節では、どのような構文に参

与するかという統語的観点から、それぞれの形容詞が段階的であるかどうかを分類するものについて、2.2 節では、形容詞の意味的な観点から、比較構文に参与するかどうかの分析をするものについて示す。2.3 節では、有界性 (boundedness) の観点から、共起する副詞を基準にして形容詞を分類する研究、最後に、2.4 節では、スケール性の根本に関わる心理的な段階化 (grading) に関する研究を示す。

2.1 段階性の統語的基準

Quirk *et al*. (1985) や安井他 (1976) は、形容詞が段階的 (gradable) であるのか、非段階的 (non-gradable) であるのかにより、形容詞の意味的な下位分類 (sub-classification) ができると指摘する。その区別の基準は、形容詞が比較構文 (comparison)、how 疑問文に参与するかどうか、強意語 (intensifier) による修飾をうけるかどうかなどによって判断できると考える。

(1) Gradability is manifested through comparison: tall, tall*er*, tall*est* (…) Gradability is also manifested through modification by intensifier, *ie* adverbs which convey the degree of intensity of the adjective: *very* tall, *so* beautiful, *extremely* useful.
(Quirk *et al*. 1985: 435)

安井他 (1976: 117) の定義において、段階的とは、「順次段階を表すことができるということ」、非段階的とは、「順次的な段階を表すことはできず、白か黒かの二者択一の絶対的判断を表している場合」である。その判断基準は (2) のような how 疑問文のような構文に参与するか／しないかである。

(2) a. How cute the girl is!
b.* How asleep the girl is!
c.* How asleep is the girl? (*ibid*.: 119)

しかし、ここでは、それぞれの構文内に参与しやすい、もしくは明らかに参与しない典型的な事例しか扱っておらず、また、構文文法において説明されるような構成要素（ここでは、形容詞）の意味と構文の意味が相互作用して、意味の強制 (coercion) や調整 (adjustment) が行われるという点は考慮に入れられていない (cf. Goldberg 1995, 2006) 。そのような構文との相互作用が、それぞれの文脈の中での形容詞の意味を決定するのに重要であれば、段階的もしくは非段階的であることがはっきり定まっていない形容詞は構文による影響を強く受けてしまい、結果的に、特定の構文内での生起可能性により形容詞の意味を決めることはできないと考えられる。安井他自身で指摘されるように、特定の構文に参与するかどうかによる基準においては、「すべての非状態的形容詞は、段階的」であり、「ほとんどの状態的形容詞も段階的」である、と考えられて分類ができない。つまり、特

定の構文に参与するかどうかという観点から、レキシコンとして段階的な形容詞か否かを正しく決めることはできない。

またさらに、安井他にて同一表現 (e.g. *religious*) であっても、段階的（「信心深い」）と非段階的（「宗教上の」）の両方の可能性があることということが指摘されている。そのとき同一表現においてまわりの文脈や生起環境を見なければ意味を特定できないのは明らかであり、それにもかかわらず、まわりの文脈や生起環境をテストによって変えてしまうことは、形容詞が語彙としてどのような意味をもっているかを正しく判断できなくさせる。よって分析方法として、まわりの文脈や生起環境を維持し、それぞれがどのような意味で使われているかを判断しなければならない。

以上により、これらの先行研究はスケール性に関わるひとつの基準にはなるにしても、それぞれ具体的に形容詞の段階性を決定することはできない。語彙的・意味論的な基準から、構文への参与のしやすさを考慮にいれなければならないが、それについて取り扱った研究として、次節で示す Bolinger (1967) がある。

2.2 比較構文と意味的基準

Bolinger (1967) は、比較構文 (comparison) の形式をとる形容詞の意味的な基準について議論を行う。結論的に、比較構文の可能性は、形容詞がスケール上の領域 (a range on the scale) なのか、点だけ (only a point) を示すのかという意味的な基準にあると考える。 以下で、Bolinger (1967) の議論において、要点となるところを示す。

まず、比較構文の形式をとる形容詞は、以下の３つの共通する性質を持つと考える。(i) 程度副詞による修飾が可能かどうか (e.g. *very red, intensely practical, uncommonly deserving*) 、(ii) 母音を伸ばし程度の強調を許すかどうか (e.g. *It's deep* /di:p/*!, It's biological* */bayə la:jikl/*!*)、(iii) (3)、(4) で示されるように、叙述用法としてつかわれるかどうか、である。

(3) The decision was crucial. /The decision was more crucial. /a more crucial decision.
(4) The man is medical. /*The man is more medical. /*a more medical man (*ibid.*: 4)

そして、Bolinger は比較構文に参与する可能性は、スケール上の領域 (a range on the scale) なのか、点だけ (only a point) なのかという意味的な基準によって決まると考えるため、「極」や「数字」は基本的に比較の形式をとらない。しかし、(5)、(6) にて示されるように、ある意味解釈においては、容認ができると指摘する。

(5) * a more single-headed (double-headed, triple-headed) figure
(6) a more single-minded person (*ibid.*: 7)

さらに、例えば *utter fool* のような尺度上の最終地点 (extreams of the scale) などの点を意

味する形容詞 (e.g. *initial, medial, perfect*) であれば、確かに、基本的には**It is more perfect.* という文は容認されないが、「誇張 (exaggeration) 」の意味として *a more perfect union* は容認されるということを指摘する。また、 (7) のように、中間的存在 (e.g. *tan, tepid, lukewarm, middling, fair*) は、比較構文の形式をとらない。しかし、同様に、 (8) のように、話し手が領域を意図すれば容認することができ、形容詞の使用における柔軟性を指摘する。

(7) * His shoes are tan but yours are tanner.
(8) Your shoes are (a sort of) tan but mine are tanner (more truly tan). (*ibid*.: 8)

以上のように、Bolinger (1967) は、形容詞の意味解釈（「点」か「領域」か）を基準として、比較構文の形式をとるかどうかについて述べた。さらに、どのような形容詞が比較の形式をとりにくいかについての傾向（極、数、最終地点）についても述べたと言える。ここで、重要なことは、意味解釈の傾向が存在することを認めつつ、「（伝達の）意図」という観点から意味解釈の柔軟性を示唆している点にある。

一方で、問題であるのは、それぞれの形容詞が、どのような傾向があるのかを示すに当たって、「点」「領域」を示す形容詞とはどのようなものであるかということは明らかでない。例えば、日本語で考えてみると、「赤い」「青い」などの色彩形容詞はどうか、「丸い」「鋭い」などの形式を表す形容詞はどうか、「楽しい」「辛い」などの感情形容詞はどうかなど、様々な形容詞を観察する際に判然としない点が残る。そしてさらに、それぞれの形容詞のある傾向がどの程度であるのかということを明らかにすることもできない。

さらに、Bolinger は、意味解釈の柔軟性があると考えつつも、基本的に段階的か否かの二分法を採用している。構文に参与して強制・調整される前のスケール性に関わる違いの動機付けがなく、語彙レベルに還元できるより詳細な分類をしていない。次節で示すように、Paradis (2001) は、認知言語学的な観点から、形容詞に関して語彙レベルにおけるより詳細な分類を試みる。

2.3 有界性と共起する副詞に基づく分類

形容詞のスケール性に関する認知言語学的な研究として、Paradis (2001) がある。そこでの主張は (9)、(10) の引用で示されるように、形容詞の基本的な特徴として、段階性に関連する「有界性」があるということ、その性質は固定的ではなく、文脈に応じて変化するものであるということである。

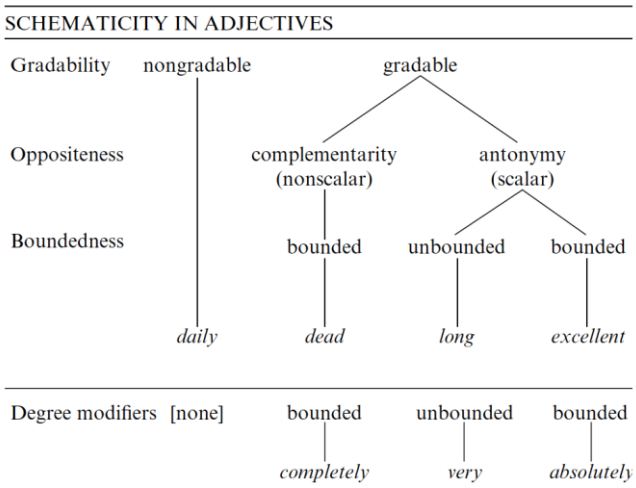
(9) I propose that boundedness in adjectives is associated with gradability, which is a basic characteristic of adjectives in a similar way as countability is a characteristic of nouns and aktionsart of verb.
(10) …the property of boundedness in adjectives is not fixed but can be changed through contextual modulation(coercion). (*ibid*. : 48)

以下では、Paradis (2001) での議論において、要点となるところを示す。まず、 (11) の引用で示されるように、内容ドメインとスキーマ・ドメイン、そして解釈のモードをそれぞれ区別し、それら 3 つのレベルで形容詞が区別できると考える。形容詞は内容語 (content word) であり、内容ドメインが前景化 (foregrounding) する。しかし、形容詞は、段階性を含め、スキーマ・ドメインによって構築 (configure) されると考える。それぞれの形容詞は、ただ単に狭義の意味内容による差があるだけではなく、概念的な構造の構成のレベルによって、区別できることを示唆する。

(11) …I distinguish two types of domains, the content domain and the schematic domain. Content domains involve meaning proper, while schematic domains provide the conceptual representations for specific configurative frames. …In addition to these domains, there is an operating system consisting of different modes of construal which are imposed on the domains. (*ibid.*)

以上の議論を基にして、表 1 で示されるように、段階性 (gradability)、反対性 (oppositeness)、有界性 (boundedness) におけるそれぞれ二値的な分類と副詞修飾語の関係に言及する。その観点から、4 つの分類ができると考える。一つ目は、〈非段階的〉形容詞群 (Non-gradable adjectives) である。例えば、*daily newspaper, classical ballet, pictorial atlas* などは、いかなる強意語とも共起しない (*?a very daily newspaper, ?an absolutely daily newspaper, ?a completely pictorial atlas*)。二つ目は、〈段階的〉〈非尺度〉〈有界〉形容詞群である。例えば、*dead, true, identical* であり、これらは、どちらか一方の選択的 (either-or) な意味である。三つ目は、〈段階的〉〈尺度〉〈非有界〉形容詞群であり、例として、*long, good, nasty* がある。これらは、*very* などの副詞と共起する。四つ目は、〈段階的〉〈尺度〉〈有界〉形容詞群である。例として、*terrible, brilliant, disastrous, excellent* があり、これらの形容詞は、ある性質の最も高い（もしくは、低い）程度を示す表現群である。これらは、*completely* という副詞と共起する。

表 1　三つの基準にもとづく形容詞の分類 (Paradis 2001: 54)



最後に、文脈と強制 (coercion) の関係について言及している。先に述べたように、有界性は固定的ではなく、文脈による変化がある。段階性についても同様である。例えば、通常 *sober* という形容詞は、「しらふである」という「どちらか一方の選択的な意味 (either-or) 」の解釈 (reading) であるが、*The next day my guests are all rather sober.* という表現が可能で、〈段階的〉〈尺度〉〈非有界〉形容詞群の解釈を受ける。このときには、滑稽に関する程度の尺度解釈 (jocular scalar reading) になる。しかし、このときに、安井他 (1976) での議論と同様に、*sober* の別の意味である「思慮深い」という意味が想起されることもあり、曖昧であると指摘する。

以上のように、Bolinger と同様に文脈との関係やその柔軟性に言及しつつ、形容詞を 4 つに分類している。それぞれが二値的な基準ではあるが、明示的で詳細な分類となっている。しかし、Bolinger と同様に、柔軟な解釈の変更があるとする上で、それぞれの形容詞がレキシコンとしてどの程度定まった解釈の傾向を示すのかということについては依然として明らかでない。

さらに未だ本当に 3 つの基準で十分かということに関して検討の余地がある。本論では、次節で紹介する Sapir (1944) の段階化の概念を援用し、Paradis の挙げた基準とは別の観点からスケール性に関わる基準（ここでは、パラメター）を設定することを試みる。

2.4 心理的な段階化

Sapir (1944) は、形容詞等の品詞の区別に限らず 、段階化 (grading) 、もしくは段階性の判断が心理的処理として根源的であると位置づけ、それが様々な言語現象の基盤にあると考える (12) 。

(12) The first thing to realize about grading as a psychology process is that it precedes measurement and counting. ... In other words, judgments of quantity in terms of units of measure or in terms of number always presuppose, explicitly or implicitly, preliminary judgments of grading. (Sapir 1944: 122)

段階化とは、同じクラスに複数の値がある (a, b, c, …, n) ということである。Sapir は、その段階を基にして more/less の相対的な位置づけが基盤にあり、それから、(13a) のような数量を示す表現、(13b) のような比較表現、さらに (13c) のような絶対的（比較していない）と思われる形容詞表現などがあらわれてくると考える。

(13) a. A has a volume of 25 volume cubic feet.
b. A is twice as many as B.
c. A is small. B is large. (*ibid.*)

特に、 (13c) で示されていることは本論においても重要な役割を担う。それは、形容詞

の意味はそれ単独において、比較の意味が暗示的に存在すると考えるということである。形容詞として語彙化されるためには、前段階として、他の状態との相対的な位置づけ、つまり比較が関連しているということであり、それは、次節以下での議論において根本をなす。そのような根源的な概念は、結果論的な従来の段階的／非段階的の二分法を避け、その間の連続性や動機づけを説明する基盤になる。また、次節で値に関して、Sapir を援用しつつ値を定義し直して、新たな形容詞のスケール性に関わるパラメターを提案することができると考える。

3. パラメターと解釈のタイプ

本節では、スケール性の観点から、形容詞の使用においてどのような解釈のタイプがあるかに関わる意味的・機能的なパラメターを提案する。まず、3.1 節で、スケール性を構成する値について述べ、3.2 節で、パラメターを提案する。3.3 節では、いくつか実際の言語表現の各パラメターを分析し、最後に 3.4 節では、同じ参与者から得られた値のグループの重なりにより生じる語用論的含意と基準形成について説明をする。

3.1 値

形容詞のスケール性に関わるパラメターを包括的に挙げるために、まずスケールを形成する要素がどのようなものであるかを明らかにする必要がある。次に、その要素のあり方（数、組み合わせ、並び方など）の可能性があげられ、スケール性のパラメターが定まり、それにより説明できる範囲と内部の分類（つまり、解釈のタイプ）が設定され、新たな観点から言語の記述ができる。本論において、その要素を「値」と呼ぶが、形容詞に関して言えば、出来事の中でプロファイルされる「参与者」に関わる情報であり、その情報が値であるためには、他の情報となんらかの違いがあり比較できなければならない。当然、物理学的に言えば、その値はさらなる要素に分解されて説明される可能性がある。色彩であれば、人間が知覚する色は、光の波長などに還元される。しかし、そのような物理学的に説明される現象は、影響を受けることがあっても、無意識下であり、人間の概念世界において存在するとは限らない。色彩表現は、そのような光の現象が説明される前から存在している。言語の構築において関与しているのは、高次の認知的処理であり、色彩であれば、色に関して得られる情報そのものである。当然、そのような情報（ここでは、「値」に相当）は、関連はあっても、言語とは独立している。すべての知覚情報を弁別的に言語化することはできない。言語を説明する際に、出発点となるのは、そのような情報であり、比較でき違いが見いだされる値である。言語とは独立する知覚や認知に関わる根源的な要素から言語現象を説明する試みであるという点で、本論は認知言語学の研究である。

値は必ずしも視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感で得られたものに限らない。知覚 (perception) を通して概念世界で作り得た情報、例えば、感情、判断が値となる可能性もある。形容詞で言えば、「恥ずかしい」や「つまらない」などが関連するが、そのような感情や判断に関して、非常に細かく分かれた言語表現がある。

また、ものと主体との関わり方によって、知覚情報は異なる。例えば、日本語において、「冷たい」と「寒い」という形容詞があるが、前者は物体に対して、後者は気体に関して主体（概念化者）が得た値である。また、それらの区別がなく、英語の *cold* においては抽象的な〈温度〉という別の主体との関わり方が想定される。

3.2 パラメター

以下では、「値」に関わる A から H の 8 つのパラメターを提示する。

3.2.1 参与者の抽象度 (A)

形容詞のスケール性を議論する上で重要なことは、主体が値を得る対象である「参与者」に注目することである。参与者に対して人間が得ることができる情報は様々である。例えば、それがどこにあり、どのような状態で、どのような特性をもっていて、どのような影響を及ぼすかなど、人間の経験を通して認識されるものである。そして、そのような参与者が二つ以上現れて比べられるとき、もしくは、時間軸上で同じ参与者が比較されるとき、例えば、地面からの高さという面に焦点があてられると、「より高い」「より低い」という概念が想起できる。当然、地面からの高さという面で比較されるのは、一回きりではなく、無限に繰り返される。このとき、 (i) 単一の参与者だけではなく、抽象化された同じ種類の参与者から値を得ることと、(ii) 単一の種類の参与者だけでなく、別々の種類の参与者から値を得ることがある。ここでは別の種類の抽象性であると考え、本節では、前者 (i) について、次節では、後者 (ii) について詳しく説明する。

一方の極として、例えば、「これ、重い！」という眼前描写の発話において、主体がその場でなんらかの身体経験を伴って（腕に抱えているなど）、目の前にある参与者に関わる情報を得ることができる。これは特定の対象に対して得られた値であると言える。もう一方の極として、「象は重い」という陳述文において、前者のような値が、象というタイプの一つ一つのインスタンスに関して得られ、それらが様々な方法で集約され、一般化される。同じ種類のものに関して、どれだけの参与者の数が想定されているかは、文脈によって異なるといえる。これが、「参与者の抽象度 (A) 」として設定される形容詞解釈のパラメターの一つである。

同一の種類の参与者が想定されたときでも、値の獲得という観点から、それが具体的であり、単一の値を得ているのか、それとも、抽象的であり、複数の値を得ていることが想定されているのかで異なるが、以下で、この違いは、構文（主語構文、など）や直示表現 (deixis) （この、あの、今日、など）などの文法的要素と関連していることを示す。

例えば、(14-16) は、前者（左側の文）はその場での値を得ていて（具体的）、後者（右側の文）は様々な値の獲得の総合であり（抽象的）、各々の文法的要素（四角括弧で示される）と関連するとみられる。左右二つの文を比べて、表現として自然であると判断できる場合には下線を引いている。容認度が低いと思われるものに ‘?’ をつけている。示されるように、(15) (16) の例で非常に微妙で判断が難しいが、容認度の差が生じている。

(14) [直示表現]

a. この象は大きい / 象は大きい

b. 今日の東京は寒い / 東京は寒い

(15) [ガ格とハ格]

a. 膝が痛い / ?膝は痛い

b. 雪が白い / 雪は白い

c. 飴がおいしい / 飴はおいしい

(16) [無助詞とハ格]

a. 膝痛い / ?膝は痛い

b. ?雪白い / 雪は白い

c. 飴おいしい / 飴はおいしい

それぞれ左右の文で述部の意味内容は同じであり（例えば、「雪」に関する「白さ」の叙述）、上下の文で異なる。人は異なる意味内容において異なる知識（例えばここでは、「膝は常に痛いもの」ではなく、「雪は常に白いもの」）を有しているであろう。一方形式面で、それぞれの格表示（例えば、ハ、ガ、無助詞）という文法的な要素は、それぞれの機能をもつ。そのとき、述部の意味内容と文法的要素は相互関連しながら、文全体としてなんらかの意味を伝達することができる。ここで、知識として含まれる述部の抽象性もしくは適用範囲の相違に注目され文全体としての自然さに関わるならば、文法的な要素に抽象性に関わる機能の相違があると考えられる。逆から言えば、別々の抽象性に関わる機能をもつ文法的な要素が、容認度や文としての自然さに影響させている。

一見すると、そのような文法的要素や構文 (construction) との関係によってのみ、形容詞の参与者の抽象度は決定されると考えられる。しかし、上の例から、全ての形容詞に対して、同じ可能性で特定の構文がとられるわけではないことは、容認度の差が生じていることから明らかである。それぞれの形容詞は、参与者と関連して、形容詞の構文のえり好みがあるということであり、総称文のなりやすさはレキシコンとして形容詞によって異なる可能性はある。もちろん、それぞれの形容詞がどのような名詞をとりやすいかが大きく関与するだろうし、一時的な感情を表すものと恒常的な性質を表す形容詞では異なるであろう。それは形容詞としての時間性もしくは時間の持続性 (time-stability) と関連する (cf. Givón 1984) 。

3.2.2 比較対象の種類と範囲 (B)

次に、前節の (ii) に関して議論する。再度、「象は重い」という文において、解釈のひとつとして他の動物（ライオン、ペンギン、猫、虫、など）と対比している含意がある。そのとき、それらの動物に関して、〈重さ〉に関わる同様の情報を得ている（小さい順に、虫＜犬＜ペンギン＜ライオン）。もちろん、〈重さ〉に関して言えば、他の物体（地球、家、車、本、など）に対しても、それぞれ別々の値をもつが、ここでは比較対象ではないであ

ろう。ただし、「この世界で象はなによりも重い」のように、比較対象の範囲が広く指定されて、〈重さ〉に注目されて全体にわたる比較対象を含むような表現も形成されうる。

以上のように、言語表現においてより狭いレベルで表される場合もあれば、より抽象的で広範なレベルによって表される場合もある。またさらに、「この携帯電話は重い」というとき、同じタイプの名詞カテゴリー（携帯電話全般）にあるものの値がとられる。どのような値の集合、どのような値の範囲を形成しているかは、文脈に応じて、それぞれの場合によって異なる解釈に基づく。値をとる参与者の集合という点で、これはスケール性の違いを形成する。よって、ここで「比較対象の種類の数と範囲 (B) 」をパラメターとして設定する。

文脈に応じて、参与者の範囲は様々であるが、 (17) のように、明示的に範囲が示されることもある。また、 (18) のような比較構文では、参与者の範囲が明示的である。

(17)　これは重い。しかし、このなかでは軽い。
(18) a.　こっちの方が値段が高い。
　　b.　このコーヒーはスターバックスのなかで一番おいしい。

特に、(18a) は値の獲得に関して、 (i) と (ii) のどちらの意味でも参与者に関わる抽象化がされていないという点で、もっとも原初的であるといえる。一つの比較対象をもって、ある特定の参与者に関して表されている。

一方で、このパラメターは、次節以降の「値の数」というパラメターと大きく関与する。参与者が多くとも、ある値に集中することはあるが、多数の参与者に対して値が繰り返し獲得されることで、多数の値がでてくる可能性は高い。ここで「家からの距離」という身近な例で考えてみると、子どものとき、生活範囲が自分の家周辺だけであるとき、近隣の小学校は「遠い」。しかし、隣町の高校に通学することや故郷を離れて一人暮らしするなど、行動範囲が広がるにしたがって、近隣の小学校は「近くなる」。家からの距離について様々な値が獲得され、家からの距離（近さ/遠さ）に関して、「値の全体範囲（本論では、グループと呼ぶこともある）」が形成され、広がっていく。そして、平行して「近さ/遠さ」の基準が変化する。

また、比較対象の種類に関して、どれほどの抽象度で値の全体範囲を形成するかはそれぞれの文脈に応じて異なり、その度合いにおいて連続的であると言えるが、一つ明らかな線引きができることは、ある参与者に関して、時間的に対応 (correspondence) する、つまり時間上では異なる同一の指示対象かどうか、という点にある。そのようなものを「内部比較」と呼ぶ。例えば、(19a) のような文では、含意として、A の他の状態と比べている。一方で、そうでないものを「外部比較」と呼ぶ。例えば、(19b) のような文では、他の参与者 B、C、D、…と比較している。

(19) a.　A は調子がいい。

b.　A は背が高い。

明らかに、そのような比較対象の範囲やその抽象度と関連するのは、時間的関係である。よって、3.2.4 節や 3.2.5 節で議論する「時間との並行性」や「値の移り変わりやすさ」と関連する。

3.2.3 値の数 (C)

以上で述べたように、抽象性に関して、どの程度の数の参与者が値をとり、どの程度の範囲の比較対象が想定されているか（例えば、なんらかのペンという参与者に対して、比較対象が、同じペンとカテゴリー化されるものか、筆記具全体のレベルか、文房具全体のレベルか、もしくは物体全般であるかなど）の違いがあり、様々な値が生じる。この節では、そのような値の数について考える。

先行研究では、形容詞などの段階的な表現を記述するために、単一の方向性をもった二次元の矢印のスケールが想定されることが多い (e.g. Cruse 2004, Taylor 1992, Langacker 2008) 。当然、そのようなスケールが頭の中でどのように存在しているかは明らかでない。しかし、別々の名詞で示される複数の参与者に関して、ある共通した側面（高さ、重さ、色彩、面白さ、など）において、それぞれの値が比較されることは事実である (例えば、「こっちの方が面白い」) 。そのとき、ある側面に関して、複数の値が比較され、それが無数にある可能性があり、値が並べられる。それは形容詞の解釈のタイプの一つであり、値の数に関わるパラメターに還元される。

値は、客観的な数値で表されることがある。例えば、前節の例の「家からの距離」であれば、メートル単位によって、2 点間の距離を客観的に測ることができる。それにより明らかであるように家からの距離は無限に値をとることができる。他に、温度、速度、時間、圧力、なども同様である。

しかし、そのように無限に値をとる可能性があるからといって、概念化者が様々な選択的な値を認識しているとは限らない。日常的にも、比較対象から値を得ていないことによって、なにかを表現する際に違和感を感じることがあるであろう。例えば、「このレンズはとても高い」、「このコンピュータは起動がはやい」という表現において、比較される値がすでに得られていることが前提として発せられる。つまり、他の別のレンズの値段を知っている、また他のコンピュータで起動して時間の長さを感じたことがある、などが必要である。そのため、そうでないとき、例えば、「このレンズはとても高い。でも、他のレンズがどうか知らないので、なんとも言えないが。」という発話や感覚が生じることがある。それは、前で値段に関してある印象をもち、しかし、比較対象の値を知らないことによる発話の妥当性の不安があり、後ろの文でそれを説明している。また、同様にして、「この宇宙人は、背が低い。」という文が奇妙に感じられることがあるならば、他の地球外の生物の背の高さの値について得たことがなく、値が設定されづらいことによる。勿論、人間と比べることや、他の地球外生物の背の高さの値を得ていれば、自然な解釈はできる（もしくは、

強制的にそのような解釈に導かれる)。

一方で、無限の値の可能性はあっても、値の数が限定されることがある。そして、それは様々な文脈の中で決まる。例えば、色彩表現は基本的には様々な値を同時にとるが(「この柿はとても赤い」)、郵便ポストでは一つの値しか想定されていないであろうし(＝全て同じ色である)、信号であれば、共通して二つないしは三つの値しか想定されていない。また、「青い(色の)ペンをください」という文であれば、様々な文脈が想定はできるが、その店に置いてあるペンの色の数が値に相当し、値の数に限度があると考えられるのが一般的であろう。

以上のように、値の数は状況によって様々である。よって、(想定される)値の数 (C) を形容詞解釈のパラメターとして設定する。解釈のタイプは、無限、有限に分かれ、さらに後者は、具体的な数 (1, 2, 3, …) が考えられる。

3.2.4 境界線 (D)

次に、パラメターC の「値の数」に関連して、値の全体範囲(グループ)の中の最大(最小)の値など境界部分に注目して、パラメターが立てられる。まず、最大値や最小値など境界が想定されない値の並べ方がある。例えば、(レキシコンのレベルで予想されることであるが、)「いい」「悪い」「おもしろい」などの評価を表す形容詞であれば、どこまででも限界点は設定されず基本的に境界がない。次に、「長い」「大きい」などの距離、時間、量などを表す形容詞は、物理的な制約により「0」という限界値が想定され、もう一方の極は、特に制限はない。つまり、値が正数である「片側境界」である。最後に、「赤い」などの色彩は(可視光に限り)範囲が限定されるため、両側境界であると基本的に想定される。また、「丸い」などの形式を表す形容詞にしても、大抵値が一つに定まるため、両側境界である。そのような意味的性質のため、「完璧に、完全に」などのような副詞は、限界値が定められていない「いい」や「長い」とは共起しづらく、値が一つに定まる「丸い」(完全に丸い)にて自然な表現である。

しかし、これらの境界線に関する解釈のタイプも文脈に応じて変化しえるため、数例の判断により、形容詞と解釈のタイプを一対一対応させ、単純に意味論やレキシコンのレベルで決定することはできない。例えば、「長い」という形容詞は、圧倒的に (20) のような片側境界であることが予想されつつも、(21) のように、実際の長さに関係なく、心理的印象によるものには境界がなく、もしくは (22) のように比較対象がはっきりして、値が完全に決まっている場合、両側境界であるといえる。

(20)　長い間、知恵袋してるけど、それだけは解かりません。【片側境界】

(21)　清朝の開国とその滅亡清朝と攘夷思想　清朝は満州からおこり、明王朝とは約三十年にわたる長い戦争の後、明の王室が自滅した後を受けて北京に入り、そのまま国の主権者として納まった。【境界なし】

(22)　波長は波の山と山の間の間隔で，これが短いと細かく振動する波となり，長いとな

だらかに振動する波となります。【両側境界】[1]

3.2.5 時間との並行性 (E)

冒頭で述べたように、形容詞は、世界の静的な状態に言及することと、動的な対象のある一時的局面を切り取ることという大きく分けて二つの機能がある。後者に関して、前提となるのは、値の連続的な取得である。つまり、主体（概念化者）が、現実世界にある対象（参与者）に対して、主体的に働きかけて値が得られるが、それが時間軸上で別々の値をとり、値が変化する。それを前提として、形容詞は切り取られた特定の局面を示すことができる。そのとき、時間軸上の他の異なる値と比べられる。これは、(19a) のような、時間上で異なる同一の参与者での比較、つまり内部比較と関連がある。

他のパラメター同様、値と時間が並行的かどうかは解釈の問題であり、前後文脈など生起環境によって定まる。その一方で、値と時間の並行性は参与者に関する知識に強く依存しており、談話文脈に影響を与えることがある。例えば、「信号」の〈色〉であれば、必ず移り変わるものであり、たとえ文中で、そのような移り変わりが想定されずとも、そのような知識が背景にあるのは変わらない。一方で、そのような知識があることにより、文脈上、その参与者の時間的な移り変わりが含意、意図、明示されることがある。一つの明示的なかたちとして、「今、赤信号だ」「赤信号になる」のような時間表現との共起がある。他にも (23) のような時間を表す表現もある。

(23) a. 今日は非常に寒い。
b. この時期、桜が綺麗だ。
c. だんだん値段を安くする。

3.2.6 値の変化のしやすさ (F)

上のような時間との並行性を前提として、ある値から他の値に変わりやすいかどうかが異なる。つまり、“a→b→c→d→e→f→…”というように値が変化するとき、その矢印で表される変化の可能性（以下、「変異可能性」と呼ぶ）に違いがある。例えば、色彩に関して、「(夕方の）空の赤さ」、「顔の赤さ」、「郵便ポストの赤さ」、これらは順に変異可能性が低くなると考えられる。空に対して得られる色彩は、太陽との位置関係により自然に変化するものであるが、郵便ポストの色彩は、ペンキを上塗りする、もしくは、日本にあるポストの色を変更することによってようやく変わるものであり、変異可能性に大きな差がある。当然、これは時間との並行性に影響し、形容詞の伝統的な議論である一時性（偶発性）/恒常性と密接な関連性がある。「値」に置き換えると、値が変化しない値であるのか、それとも、一時的な値に過ぎないのかという違いである。それは、変異可能性が低いのか、高いのかに起因し、還元できると考える。英語に関して言えば、そのような一時性（偶発性）/恒常性（変異可能性）のパラメターは、形容詞と名詞の位置関係（前置/後置）に関わるとされる (Quirk *et al*. 1985)。

3.2.7 値の変化に関わる時間の長さ (G)

値の変化に関して、ある値から別の値に変わるときの時間的な長さ、延いては、言語表現が示す値の集合や値の全体範囲（グループ）[2]にかかる時間は様々である。つまり、"a→b→c→d→e→f→…"というように値が変化するとき、矢印一つ一つの長さやある部分／全体のまとまりにかかる時間の違いがある。全体的な時間の長さの違いは、パラメターB の比較対象の範囲や、パラメターC の値の数が基盤となる。例えば、「彼は褒められて頬が赤い（参与者：彼の顔）」であれば、時間的な長さは短く、数秒から数分単位であると想定される。一方、「西の空が赤い（参与者：西の空）」であれば、数時間単位であると想定され、「ここらの土は赤い（参与者：ここらの土）」であれば、その変化には数（千／万）年単位がかかると想定される。恒常性などに関わる前節のパラメターF とも相互関係がある。

3.2.8 表現の数 (H)

ある参与者がもつ特定の値や値の集合に対応する言語表現がある。Langacker (2008) を参照すると、形容詞は、一つの参与者とスケールのある領域との関係を示すことができる。言い換えれば、ある値の集合を形容詞は言語化している。さらに本論では、値が無限（パラメターC）にある場合に留まらず、「形容詞」はスケール性のある値や値の集合を言語化する表現である、と広く定義する。

そして、今まで述べたように、概念化者は、参与者に関して様々な値をもっている。そのような値のあつまりが、値の全体範囲（グループ）である。ここでの値のあつまりは形容詞がもつ「値の集合」とは異なる。値の集合は、言語表現が、慣習的に示す値のあつまり、もしくは、文脈に応じて、話し手が意図する、もしくは聞き手が喚起する値のあつまりである。

そのように、二つの値のあつまりは異なる。そして、値の全体範囲の中に値の集合を形成する。つまり、値の全体範囲の中で、複数の表現が存在することがある（むしろ、それがほとんどである）。そして、値の全体範囲内で対立的・相補的である（e.g. こっちの柿は赤いが、あっちの柿は青い）。[3]

3.3 実際の表現におけるパラメターと解釈のタイプの記述

次に、いくつかの形容詞の使用を例にして、それぞれのパラメターに関してあらわれる違いを実際にみていく。ここでは「色彩」（特に赤）に関わる形容詞を挙げて、参与者や文脈が異なることによりパラメターも異なることを示したい。今までのパラメターをまとめると以下の通りである。

【参与者に関して】
A = 参与者の抽象、B = 比較対象の種類と範囲
【値に関して】
C = 値の数、D = 境界線
【値と時間の関係に関して】
E = 時間との並行性、F = 値の変化のしやすさ、G = 値が変化に関わる時間の長さ
【表現に関して】
H = 表現の数

以下では、「時間」「値」「言語表現」の相互関係を表により明示しながら、実際の言語表現をそれぞれのパラメターにより分析していく。具体的には、左から 1 列目に、時間の流れを「T_n」で示し、その右の下付きの数字は順番を示す（T_0＞T_1＞T_2…；それぞれの T の間は一定であるとは限らない)。2 列目には、値を「S_n」で示し、その右の下付きの数字によって値の違いを示している（S_1、S_2、S_3、S_4)。ちなみに、無限の値の設定ができる場合は、m や n により不定の数を示す。そして、3 列目は、言語表現の値の範囲を示す。最後に、4 列目には、それぞれの文や文脈によって示される値に関する情報を示しておく。

3.3.1 「柿」

まず、時間の変化がわかりやすい例である。「柿」の〈色〉について注目した言語表現として、「この柿は赤い」「この柿は青い」のような表現がある。しかしここでは、パラメターの選択は文脈に応じて流動的であるため (25) のような文の解釈を考え、「時間」「値」「言語表現」の関係を記述する。以下の表 2 にてそれを具体的に示す。

(24)　隣の家の柿が赤くておいしそうなので、一個頂戴しよう。

表 2　P = 隣の家の柿：D = P の色彩

T_0	:	S_0	：青（緑）：	
T_1	:	S_1	：青（緑）：	
T_2	:		・	
T_3	:	S_m	：黄：	
T_5	:		・	
T_6	:	S_{n-1}	：赤（オレンジ）：	⇒おいしそう、一個頂戴する
T_7	:	S_n	：赤（オレンジ）：	⇒おいしそう、一個頂戴する

それぞれのパラメターを考えていく。A に関して、隣の家の柿はひとつだけではないと考えられ、値の獲得は個別的ではなく、複数の柿から値を得ている。日本語の場合は名詞や名詞句が数の区別を形態統語論的におこなわない。そのため、当該指示対象が単数か複

数かが明示されていないが、通常の解釈としては複数 (persimmons) である。B に関して、値の取り得る比較対象は、時間的に異なる参与者自身であり、他のなにかと比べられてはいない[6]。C に関して、比較できる限り内部に無限の値をとり得るため、人間の色彩を見分ける能力に応じて無数に値がある。D に関して、両端に境界がある。E に関して、時間と並行的であり、変化が認識できるものである。F に関して、値は恒常的なものではなく、変化しやすい。G に関して、値の変化は全体で数週間であると推定できる。H に関して、表 2 から明らかであるように、値の全体範囲の中に表現の集合を形成する。以上、まとめると以下の通りである。

(25) A＝［抽象的］、B＝［内部比較］、C＝［無数の値］、D＝［両端境界］、E＝［並行的］、F＝［変化しやすい］、G＝［比較的短い（数週間）］、H＝［複数ある（3 以上、例えば、黄色、青（緑））］、

3.3.2 「信号」

次に、より状態が持続しない、変化が激しい例である。「信号」の〈色〉に注目した (27) の表現について詳しくみる。そして、同様にして、「時間」「値」「言語表現」の関係を明示したのが表 3 である。

(26)　赤信号だがかまわず直進した。（信号はまだ赤いが、かまわず直進した。）

表 3　P=信号：D=P の色

T_0	:	S_0	:	赤	:	⇒直進した
T_1	:	S_1	:	青	:	
T_2	:	S_2	:	黄	:	

「柿」の場合と明らかに異なっているのは、値の全体範囲が限定されていて、値と言語表現が一対一対応していることである。そして、各々のパラメターを検討する。A に関して、この文では、値を得ている参与者は具体的であり、目の前の信号である。B に関して、比較対象は当該信号のもつ他の色彩である。C に関して、表で示されるように、値は限定的で２か３である。D に関して、値の数は限定されているため、境界線が両側にあると考えられる。E に関して、変化が想定されているため、時間と並行的である。F に関して、時間がくれば値は簡単に変わるものである。G に関して、そのような変化の時間は非常に短い。H に関して、値に対応する言語表現がそれぞれある。ちなみに、このように値の数が少なくそれらがそのまま言語表現と対応する場合、「*非常に赤信号」のように強意語と共起することができない。以上、まとめると以下の通りである。

(27) A＝［具体的］、B＝［内部比較］、C＝［複数の値 (2, 3) ］、D＝［両側境界］E＝［並

行的]、F＝［変化しやすい]、G＝［比較的短い（数分)]、H＝［対立する複数の表現]、

3.3.3 「服」

最後に、変化の仕方がさらに異なる例をみる。服の〈色〉に注目した (28) のような表現がある。服一つ一つは別個であり、色彩に関して恒常的であろう。しかし、他の日に着た服装を比較対象とすることができ、そのなかで比べて、「似合っていない」のような判断ができる。同様にして、「時間」「値」「言語表現」の関係を明示したのが表 4 である。

(28)　赤い服を着てみたが、あまり似合っていなかった。

表 4　P=着た服：D=P の色

S_0	:	（青）	：服 A：	
S_1	:	（緑）	：服 B：	
S_2	:	（黒）	：服 C：	
S_3	:	（白）	：服 D：	
S_4	:	（黄）	：服 E：	
S_5	:	赤	：服 F：	⇒似合っていない

そして、各々のパラメターの検討である。A に関して、“赤い”という価値を得ているのは一個の具体物である。B に関して、値のとる参与者の範囲は、話し手の所持する服であるあり、事前に着た服であると解釈できる。C に関して、値はそれらの服の色彩であり、複数あると想定される。D に関して、値の数は限定されているため、境界が両側にある。E に関して、時間と並行的であると言える。F に関して、着替えれば値は変化するため、変異可能性は高い。G に関して、毎日の着替えであるならば日ごとである。H に関して、それぞれの値に対応する表現がある。以上、まとめると以下の通りである。

(29) A＝［具体的]、B＝［所持する服]、C＝［複数の値]、D＝［両側境界]、E＝［並行的]、
F＝［変化しやすい]、G＝［比較的短い（数時間)]、H＝［対立する複数の表現]

3.4 値のグループの重なりと語用論的含意や基準形成

参与者は様々な側面に注目して違いが見いだされ、概念化者に値を与えてくれる。そして、前節で示したような、それぞれの側面に関して独立した別々のスケール性が形成される。しかし、それらを構成する値と値が結びつき、全体的に相互関連をなし、語用論的含意を生じさせることや基準の形成の仕方に関わることがある。

特に、値と時間が並行的である場合において、つまり参与者の時間的変化が想定される場合において、二つ以上の時間軸が対応関係 (correspondence) をもち、ある側面の値と別の側面の値が結びつき、それぞれの値のグループ全体が時間的に一致する。そうするこ

とで、ある側面のある値であることに言及すれば、別の側面のある値であることが含意される。逆に言えば、ある側面のある値でないことに言及すれば、別の側面のある値でないことが含意される。このような複数の値のグループの関連づけは、その場限りであるかもしれないが、基本的には経験的に形成された概念化者の知識であると考えられる。

ここでは「柿」を例にとる。「柿」に関して、注目される側面は様々にあるであろうが、例えば、〈色彩〉〈熟成度（堅さ）〉〈評価（味）〉〈形式〉がある。しかし、この中で〈形式〉だけは「柿」の場合において時間的変化は想定されないであろう。形式は丸いかたちで一定であると考えられる。それ以外に関しては、時間的変化があり、同時にそれらは相互関連すると概念化者の知識にはあるはずである。よって、(31)、(32) のようにどの側面に関して言及しても関連する値が想起される。括弧内は想定される含意である。

(30) この柿は、赤いね（GOOD, MATURE, SOFT）
　　この柿は、いい（おいしい）ね（RED, MATURE, SOFT）
　　この柿は、熟しているね（RED, GOOD, SOFT）
　　この柿は、やらかいね（RED, GOOD, MATURE）
(31) この柿は、青いね（BAD, MATURE, HARD）
　　この柿は、よくない（まずい）ね（GREEN, IMMATURE, HARD）
　　この柿は、未熟だね（GREEN, BAD, HARD）
　　この柿は、堅いね（GREEN, BAD, IMMATURE）

また、(34) のように否定しても、同様に他のスケール性の側面が示唆される。

(32) この柿は、赤くてやわらかい。あっちの柿は（逆だ／反対だ／違う）。（GREEN, HARD）
　　この柿は、青くてまずいね。あっちの柿は（逆だ／反対だ／違う）。（RED, GOOD）

そのような相互関連は実際によく生じて、言語によって表現する判断基準となることがある。例えば、(34) の例は「長い」という形容詞が使用されているが、文脈から明らかであるように、「待機時間」と「文書」の長さがある概念化者のなかで不安や苛立ちなどと結びついており、それが「長い」と表現する基準となっていることがわかる。

(33) a.　待つ時間がやけに長い…いつ呼ばれるんだろう
　　b.　当方も冷静に説明したのですが、それが少々長い文になってしまい「気持ち悪い・短気・疲れているのでメールは読まない」と中傷されました。

以上のように、実際の言語使用では、様々な種類の値のグループが結びつき、情報の伝達を豊かにしている。

4. レキシコンとしての形容詞

最後に、今までの議論を基にして、具体的な語彙の定量的な分析を行い、レキシコンに含まれるスケール性に関わる情報を明らかにしたい。以下では、日本語の形容詞「長い」と「赤い」を扱い、それぞれの事例を一定数コーパスからサンプリングして、文脈など生起環境を参照しながら、3.3 節で行ったそれぞれのパラメターにおける分析をする。そして、一個一個の事例分析をまとめ上げ、量に基づく分析を行い、レキシコンとしてどのような情報が含まれているかに関わる一般化を行う。そのような言語事実に基づく定量的な分析により、内省に基づく直観的な意味の特徴づけでは明らかにならない、レキシコンそれぞれの解釈のタイプの傾向や、これからそれぞれの語彙がどのように使用される可能性が高いかなどの予測が経験的に示される。

4.1 分析の手段と方法

本研究において、利用したコーパスは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (KOTONOHA) 中納言」である。まず、語彙素が「長い」もしくは「赤い」であり、品詞が形容詞として特定されている事例を検索し、100 例以上抜き出した。そして、公平性を保つため、ランダムに抜き出した事例を上から順に分析対象として利用し、最終的に今回は 100 例まで扱うことにした。それら一つ一つ関して、前後文脈など生起環境を参照しながらどのような解釈のタイプであるかを判断していく。分析する事例には、多様な出現形が存在し、例えば、「ながい」「紅い」「朱い」（ここでは、これらをまとめて「ナガイ」のように片かなで示す）などが含まれるが、これらの書字の違いに関するものは全て分析対象とする。一方、否定を表す形態素「-ナイ」との接続、変化や使役を表す形態素「–なる」や「–する」との接続、さらに節が区切られるときなど、ナガクという連用形がよく用いられるが、ここでは、一般動詞を修飾しているもので明らかに副詞用法であるものは排除した。よって、ナガクナル、ナガクスル、ナガクアルは分析対象としている。

4.2 「長い」と「赤い」の語彙分析

日本語の形容詞「長い」と「赤い」を詳しくみていく。最初に、具体的にそれぞれのパラメターに関して事例分析をする前に、分析対象の事例となっている「長い」と「赤い」の出現形の違いとその割合を示しておく。表 5 に示されるように、圧倒的にそのままの形式で「ナガイ」や「アカイ」が使われることが多い。そして、時々、ナル形が使われる。これは内的な変化を示す形態素が共起し、値と時間の関係に関わるパラメターD, E, F だけでなく、パラメターB の比較対象の決定に大きく関わる。

表 5　「長い」「赤い」の現れ方とそれぞれの数・割合

意味	出現形	「長い」		「赤い」		合計	割合(%)
単純	ナガイ/アカイ	76	85	80	84	156	78.0
	ナガク（テ）/アカク（テ）	5		3		8	4.0
	ナガクナイ/アカクナイ	2		0		2	1.0
	ナガキ/アカキ	1		1		2	1.0
	ナガイナガイ/アカイアカイ	1		0		1	0.5
変化	ナガクナル/アカクナル	8	9	14	16	22	11.0
	ナガクスル/アカクスル	1		2		3	1.5
過去	ナガカッタ/アカカッタ	3	3	0	0	3	1.5
その他	ナガッタラシイなど	3	3	0	0	3	1.5

以下では、3.3 節で提示したパラメターのまとめをしたように、「参与者」「値」「値と時間の関係」「表現」という 4 つに分けて、それぞれについて記述していく。

4.2.1 参与者に関して

値を得る対象である参与者であるが、様々なかたちで形式に表される。ほとんどが直接形容詞に後続すること（例 :「長い爪」「赤い顔」）や助詞 (copula) を間に挟んで形容詞の前に現れること（例 :「爪が長い」「顔が赤い」）により参与者が示される。しかし、例えば、「首が長いキリン」「顔を赤くしたサル」のように形容詞の前後に表れて、それらを合わせて「キリンの首」や「サルの顔」を参与者として言語化するなど、文中で別々の表現から参与者を具体的に示すことがある。さらに、(34) のように、形容詞が生起する文中で表されず、前文脈を読み取ること必要があることや、(35) のように名詞として表されず、ここでは「文章の長さ」と「浅川の顔」であると参与者が推論されるように、文脈から読み取らなければならない。

(34)　久々に、「Ｃｈａｒａ」買いました♪勿論。今号だけで応募できる、オリジナルドラマＣＤ「ＤＥＡＤＬＯＣＫ」が欲しくてです★まだ、途中までで聴いてないんですが・・。（だって、長くて、難しいっぽくて・・）

(35)　a. 内容を全て書いたら長くなりました。

　　b. 浅川はこのところ元気がないと思っていたが、定期検査を受けたところ、アルコール性の急性肝炎と診断され、酒を止められていたという。しかし、きょうばかりは、というつもりなのか、相当赤くなっていた。

そのように参与者を様々なかたちで表すことがあるが、表 6 でまとめられて示されるように、量的にみると、過半数は形容詞の後に続いて名詞で表される。次に可能性が高いこととして、参与者名詞が前に来て、助詞「が」を介在し形容詞が生起する。

表 6　「長い」「赤い」の参与者名詞 (N) の位置関係とそれぞれの数・割合

<table>
<tr><th>形容詞の位置</th><th>下位分類（助詞）</th><th colspan="2">「長い」</th><th colspan="2">「赤い」</th><th>合計</th><th>割合(%)</th></tr>
<tr><td>前置</td><td>［形容詞 (A) ］N</td><td>55</td><td>55</td><td>77</td><td>77</td><td>132</td><td>66.0</td></tr>
<tr><td rowspan="6">後置</td><td>ガ格 (N ガ［形容詞 (A) ］)</td><td>19</td><td rowspan="6">36</td><td>10</td><td rowspan="6">19</td><td>29</td><td>14.5</td></tr>
<tr><td>ハ格 (N ハ［形容詞 (A) ］)</td><td>7</td><td>3</td><td>10</td><td>5.0</td></tr>
<tr><td>ヲ格 (N ヲ［形容詞 (A) ］)</td><td>0</td><td>2</td><td>2</td><td>1.0</td></tr>
<tr><td>助詞モ (N モ［形容詞 (A) ］)</td><td>2</td><td>0</td><td>2</td><td>1.0</td></tr>
<tr><td>無助詞 (N［形容詞 (A) ］)</td><td>2</td><td>2</td><td>4</td><td>2.0</td></tr>
<tr><td>他</td><td>6</td><td>2</td><td>8</td><td>4.0</td></tr>
<tr><td>前置・後置</td><td>(N_1 ガ/ハ/ヲ/ノ/モ［形容詞 (A) ］N_2)</td><td>8</td><td>8</td><td>4</td><td>4</td><td>12</td><td>6.0</td></tr>
<tr><td>その他</td><td></td><td>1</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>0.5</td></tr>
</table>

そのような様々なかたちで表される参与者であるが、ここでパラメターA に関して、つまり値を与える参与者の抽象性に関する解釈のタイプの違いの量的な傾向についてみていく。3.3 節での分析と同様にして、本来、その抽象性は程度さがあり様々な値をとるであろうが、ここでは値を得ている参与者が個別的（例：この象は大きい）であるかどうかの 2 択で判断している。下の表 7 がその結果である。

表 7　値の獲得先（参与者）の具体性と数・割合

値の獲得先	「長い」	「赤い」	割合(%)
具体（個別的）	58	61	59.5
抽象（総合的）	41	36	38.5
不明	1	3	2.0
合計	100	100	100.0

そこで示されるように、両形容詞とも一つの特定の参与者に関して値を得ているものが過半数である。一方そうでなければ、(36) のように総称文もしくは一般性が高い叙述をする文となる。

(36)　付き合いが<u>長くなる</u>と、相手への配慮や感謝の気持ちが薄まってくるものですか？

また、表 8 では、値を得る者、つまり概念化者の種類についてその量的な傾向を示している。基本的には、文を発する話者が、それぞれの形容詞にあたる値を獲得してそれを陳述している。

表 8　値の獲得者（主体）の種類と数・割合

値の獲得者	「長い」	「赤い」	割合(%)
話者	77	80	78.5
一般	20	14	17.0
特定の第三者	2	5	3.5
不明	1	1	1.0
合計	100	100	100.0

次に、パラメターB である、想定されている比較対象の種類と範囲について、パラメターA と同様、話者がどのような範囲で比較対象を想定しているかは千差万別であり、解釈のタイプを設定するのは難しい。また分析として難しいことは、比較される参与者の種類と範囲は話し手が背景的な基盤としてもっていて、明示的に表されないことである。ここでは、3.2.2 節で示した内部比較と外部比較の解釈の傾向についてみていくこととする。表 9 にて示されている通りである。

表 9　「長い」「赤い」の比較対象

	「長い」	「赤い」	合計	割合(%)
外部比較（非明示的）	83	79	162	81.0
外部比較（明示的）	8	3	11	5.5
内部比較	8	17	25	12.5
不明	1	1	2	1.0

例えば、以下の (37) のような例の場合、他の「通常のダニ」と比較しているのは明らかであり、比較対象が明示的である事例である。

(37)　この赤いダニは通常のダニと違い、暑い所が大好きなダニだそうです（正式名を忘れてしまいましたが・・・）お墓とかにもよくいますよ。

4.2.2 値に関して

まず、パラメターC である値の数について、「長い」「赤い」がどのような解釈の傾向があるかをみていく。表 10 で示されているように、どちらの形容詞も値は無限にあると想定されるものがほとんどである。つまり、ある範囲内においてどんな値も想定されていて、その中の一部（基準を超える値の集合）を表している。例えば、(38) であるが、様々な歌詞の長さが想定されて、話者が通常とは異なる程度をもつ値を指し示している。

(38)　曲が速い上に、歌詞がやたらと長いのでこの歌は随時早口言葉状態なんです（笑）。

一方で、(39) のような例の場合は、(38) と異なり、二つの参与者、そして二つの値しか想定されておらず、その中でのみ比較をしている。

(39)　女性の平均余命が男性に比較して長くなっているためである。

表 10　「長い」「赤い」の値の数

	値の数	「長い」		「赤い」		合計	割合(%)
限定	1	2	9	2	18	10	5.0
	2	6		8		14	7.0
	数不明	1		8		9	4.5
無限	整数	2	91	0	82	2	1.0
	無限	87		81		168	84.0
不明		2	2	1	1	3	1.5
合計		100	100	100	100	200	100.0

今度は、パラメターD について、表 11 でみられるように「長い」と「赤い」で大きな違いが観察された。「長い」において、その値は時間、空間、文字などであるから「0」があるため片側境界であるのがほとんどであり、一方で、「赤い」は色彩全体であっても色彩の範囲は限られているため、大部分が両側境界となっている。

表 11　「長い」「赤い」の境界線

境界線	「長い」	「赤い」	合計	割合(%)
片側境界	68	0	68	34.0
両端境界	27	95	122	61.0
境界なし	3	4	7	3.5
不明	2	1	3	1.5

4.2.3 値と時間の関係に関して

次に、パラメターE, F, G について考えていく。それぞれ、時間との並行性、値の変化のしやすさ、値が変化に関わる時間の長さである。表 12 と表 13 は前二つの結果である。

表 12　「長い」「赤い」の時間との並行性

	「長い」	「赤い」	合計	割合(%)
あり	62	36	98	49.0
なし	37	63	100	50.0
不明	1	1	2	1.0

表 13　「長い」「赤い」の変化可能性

	「長い」	「赤い」	合計	割合(%)
あり	10	34	44	22.0
なし	89	64	153	76.5
不明	1	2	3	1.5

まず表 12 で示されるように、「長い」は時間と並行的であることが多い。これは「長い」という形容詞自体が時間の長さを表すことが多いためである。一方で、表 13 で示されるように、どちらの形容詞も他の値に変化するという可能性は示唆されない。

また、パラメターF について、ここでは以下の表 14 にて「赤い」の値の変化に関する時間の長さを示す。時間と並行的な事例 34 例のうち、例えば (40) のように数分、数時間レベルが多い。

表 14　「赤い」の値の変化に関わる時間の長さ

赤い	数秒	数分	数時間	数日	数ヶ月	数年	不明	合計
数	7	11	7	2	3	1	4	34

(40)　ルーシーの顔は、まるで泣いてでもいたようにまだらに赤くなって腫れている。魅力的とは言いがたいありさまだ。【数分】

4.2.4 表現に関して

最後に、パラメターH について、まず「長い」について、(41a) のように基本的にすべてが「短い」を反意語として同じグループ内に値の集合を形成する。しかし、(41b) のように「短い」だけでなく「浅い」も同じグループ内に値の集合を形成することがある。

(41)　a. まず、図は長さについて類型化したものであり、メーカーと消費者の間に介在する業者の数（段階）が多いほど長く、少ないほど短いという。
　　b. つきあいが長いようですから、その分こじれそうな気もしますし、また逆に、長かからこその円満な（？）和解というのも考えられる気がします。

次に「赤い」の場合、青、銀、肌色、白、赤などの特定の色が同じグループに含まれることもあれば（33 例）、色彩全体が値のグループとなることもある（58 例）。

4.3 まとめ

4 節では「長い」「赤い」という形容詞に関して、コーパスからサンプリングした実例一個一個に関して、それぞれの生起環境や文脈を参照して、3 節で挙げたパラメターにより記述し、特定の形容詞に関して、どのような傾向があるのかについて一般化し、その形容

詞がどのような情報をもっているかを示した。そうすることで、その形容詞全体の使用、もしくはこれからのその形容詞の使用が予測できると考えられる。

5. おわりに

先行研究のように、ただ単に構文の参与可能性の観点から、段階的、もしくは非段階的な形容詞を判断するのではなく、そのような段階性に関わる「値」という観点を導入することにより、さらに形容詞の意味に関わる重要な視点が発見される。まず、その値とは、言語と独立した知覚情報であると定義されているため、知覚者にかかわる情報（知覚者は単体であるか一般的であるか）や知覚対象のありかた（具体的か、抽象的か）、また言語と独立しているために、その値（や値の集合）と言語表現がどのような関係になっているか、また値に関して、他のどのような言語表現との関連があるか、さらに、値の数、値のあつまりの形成のしかた、そして値のあつまりと関連して基準 (norm) の形成に関して、最後に、値の変化という点で時間の観点も関連し、これらの新たな重要な分析の観点を見いだしてくれる。

形容詞は値や値の集合を表すものである。そのように考えると、ここで値に関連して上げられたパラメターは形容詞の意味を分析するうえで、重要であることが示唆される。そしてさらに、本論では、比較される値を考慮に入れることを前提として、それぞれのパラメターを言語表現に適用した。しかし、今後さらに、個々の形容詞の分析データを増やし、比較することで、レキシコンの差をはっきりと明示的にさせてくれることが望まれる。

* 本論文は京都大学大学院 人間・環境学研究科に提出した修士論文の一部（4 章）を大幅に加筆修正したものである。本論文を完成させるにあたり、同大学院の田口慎也氏と神澤克徳氏に、内容に対しての建設的な意見をいただいた。ここに深く謝意を表する。ただし、本稿における一切の誤り等は全て著者の責任に帰する。また、本稿は科研費（特別研究員奨励費、研究課題番号：13J00431）の助成を受けたものである。

注

1. これらの例文は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (KOTONOHA) 中納言」における事例である。
2. 「値の全体範囲（グループ）」と「値の集合」は、それぞれ別々に定義されている。前者は比較対象である値のあつまりであり、後者は表現がカテゴリー化する値のあつまりである。
3. 形容詞同士が反対の関係や相補的な関係であるものが多い理由がここにあると考えられる。逆にいえば、参与者のある側面に関して、反対の関係や相補的な関係にある語をもつ、値や値の集合を示すものが「形容詞」である。ここで、反意語、相補語が、個別言語内で定義される品詞において同じであるとは限らず、伝統的に定義される形容詞だけではないのは明らかである。

参考文献

Bolinger, Dwight. 1967. Adjective Comparison: A Semantic Scale. *Journal of English Linguistics* 1: 2-10.

Bolinger, Dwight. 1972. *Degree Words*. The Hague: Mouton.

Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Cruse, D. Alan. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Givón, Talmy. 1984. *Syntax: A Functional-Typological Introduction, Vol.1.* Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Goldberg, Adele E. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1: Theoretical Prerequisite.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Lyons, John. 1968. *An Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.（國廣哲彌ほか（訳）『理論言語学』東京: 大修館書店, 1973）

Lyons, John. 1977. *Semantics, Vol.1.* Cambridge: Cambridge University Press.

Paradis, Carita. 2001. Adjectives and Boundedness. *Cognitive Linguistics* 12: 47-64.

Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Sapir, Edward. 1944. Grading: A Study in Semantics. *Philosophy of Science* 11(2): 93-116.

Taylor, John R. 1992. Old Problems: Adjectives in Cognitive Grammar. *Cognitive Linguistics* 3(1): 1-35.

菅谷友亮. 2013.　「形容詞の意味構造の多様性に関する基礎研究–結合性・スケール性・時間性の観点から-」京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士論文.

安井稔・秋山怜・中村捷. 1967.『現代の英文法 7 形容詞』東京: 研究社.

コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス (KOTONOHA) 中納言

An analysis of lexical meanings of adjectives based on scalability

Yusuke Sugaya

The aim of this paper is to reveal what some adjectives, e.g. Japanese adjectives *aka-i* (red) and *naga-i* (long), contain as lexical information in terms of scalability. The research has two steps: first, some parameters are advocated for describing each use of adjectives; second, these parameters are set in each use of a set of samples randomly extracted from the corpus.

With regard to the first step, each parameter is constructed by the combination or arrangement of "values." They are minimum units which can vary at the level of perception or conception, independent of the linguistic expressions. As a result, the parameters pertain to: (i) the number of values, (ii) the way of extension of values, (iii) the number of linguistic expressions in a group of values, (iv) the number of "participant" in a group of values, and (v) the time flowing along values. The settings of these parameters are, of course, changeable according to the type of discourse, even in the same adjective, though each adjective has the tendency on selecting their parameters.

Considering the second step, these parameters are applied to some specific adjectives of Japanese. Within a fixed number of samples including these adjectives, the parameters are set in each sample in reference not only to the sentence but also to the discourse. Eventually, it is found that each adjective shows the cluster of selection for parameters, which can be regarded as lexical information of the adjective.

Since this way of analysis has some applicability to any adjective in any language, this makes it possible to compare adjectives in a language, or across languages.